

ウェールズ人の動物学者・旅行家トマス・ペナント

吉 賀 憲 夫

Thomas Pennant: A Welsh Zoologist and Traveler

Norio Yoshiga

[Abstract] Thomas Pennant, a Welsh gentleman, is now known as a famous traveler in Scotland, Wales, England and Europe. But he started his career as a zoologist in 1766 when he wrote his first book, *British Zoology*, which made him a Fellow of the Royal Society. As a zoologist, he is sometimes noted as a scholar who filled the gap between John Ray and Charles Darwin in British zoological history. He is also known as the man who encouraged Gilbert White to write *The Natural History of Selborne* and also gave a helping hand to a young Joseph Banks, who later became the president of the Royal Society.

As a traveler, he wrote many travel books including *A Tour in Scotland* which was praised by Samuel Johnson. The book sold very well and the fifth edition of the book was published in 1791. Johnson himself wrote his own Scottish Tour book partly influenced by Pennant's book. Johnson's tour is now widely read as a standard book in this field but not so much interest, unfortunately, is paid to Pennant's book.

In Japan, it can be said that Pennant is not read widely among general readers. Only a few people who love natural history, English literature, Welsh and Scottish history and culture are interested in Pennant. Some botanists and zoologists quote him in their papers.

1. はじめに

トマス・ペナント Thomas Pennant (1726-98)は、ウェールズ人の動物学者であり、旅行家である。今ではあまり知られてはいないが、当時はかなり有名な人物であった。彼と同時代の文壇の大御所サミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson, 1709-84)は、ペナントの『1769年のスコットランド旅行記』を読み、彼が卓越した旅行家であることを認めている。

ペナントは1726年ウェールズのフrintシャー、ダウニングに裕福な地主の長男として生まれた。国境付近のウェールズの町レクサム(Wrexham)で、またのちにロンドンで教育を受ける。18歳のとき、Oxford大学 Queen's College

に入学する。在学中にコーンウォールに旅行し、著名な学者 William Borlase 博士に会い、化石や鉱物に興味を持つ。学位を取ることなく大学を去るが、当時としては珍しいことではなかった。当時の大学はオックスフォードにせよ、ケンブリッジにせよ、学問は停滞期で、あまり魅力のある場所ではなかったことが想像できる。

故郷のダウニングに帰ってからも博物学の研究を怠らなかつた。1757年にはリンネの推挙によりウプサラ王立協会会員となるが、これは彼が生涯忘れることのできない出来事となった。なぜなら、これにより彼は学者として認められたからである。1759年に結婚し、1761年に『英国動物誌』(*British Zoology*)に着手する。不幸が彼を襲う。1763年、妻死去。1765年、完成間近の『英国動物誌』中断したまま、大陸に旅立ち、フランス、スイス、ドイツ、オランダ、ベルギーを巡り、各地で著名人に会い、同好の士と友情を結ぶ。

2. 動物学者としてのペナント

帰国後、1766年に『英国動物誌』(初版、2折本)を出版する。この功績で、1767年、英国王立協会会員(F.R.S)となり、動物学者として名声を得る。ペナントの英国に於ける動物学者としての位置は、英国博物学の父と言われるジョン・レイ(John Ray, 1627-1705)と進化論のダーウィン(Charles Robert Darwin, 1809-82)の間を埋める動物学者として評価する者もいるが、レイとダーウィンという二大巨人の間にあっては、その影はどうしても薄くなってしまふのは仕方がないのかもしれない。(ちなみに、レイは『植物誌』(1686年)で、同じ種子から繁殖し永続的に繰り返すものを「種」とするという現在の生物学的「種」に通じる定義を行った人物である。)

ペナントは数多くの動物学の著作を残した。王立協会『哲学紀要』に掲載された地震や珊瑚状個体に関する論文の他、『英国動物誌』、『インド動物誌』(*Indian Zoology*)、『四肢動物史』*History of Quadrupeds*、『鳥類』(*Genera of Birds*)、『極北動物誌』(*Arctic Zoology*)などがそれである。しかしこれらの著作も、労作ではあるが、独創性はないというのが現在の評価である。彼にとって不幸であったことは、当時においては、博物学における主流は既に植物学に変わっていたことだった。ペナントの18世紀英国における博物学上の貢献は、同時代の植物学者として、また探検家としてキャプテン・クックの第1回目の世界周航に同行し、キューガーデンを創設し、のち英国王立協会会長となったジョセフ・バンクス(Joseph Banks, 1743-1820)には及ばない。

一方、彼の動物学者としての業績に新人の発掘がある。ハンプシャー州の小村セルボーンの副牧師ギルバート・ホワイト(Gilbert White, 1720-93)に『セ

ルボーンの博物誌』(*The Natural History of Selborne*)という名著を書かせたのは特筆に値するであろう。また先述したジョセフ・バンクスがまだ若かったころ、彼に助言を与えたりしたこともあった。

3. 旅行家としてのペナント

その後、彼は旅をするようになる。スコットランドには1769年と1771年2度旅行している。しかしこれは決して物見遊山の旅ではなく、その旅は『英国動物誌』の補完的意味合いから当初行われたものであり、まだ見たことのないスコットランドの動物などを実際に観察することにあつた。しかし完成した『1769年のスコットランド旅行記』(*A Tour in Scotland 1769*)は、それ以上のものとなった。このスコットランド旅行記はイングランド人によるハイランズの記述としては初めてのものであり、イングランドで多いに注目を集め、版を重ね1791年の第5版まで出版が続いた。しかし今日、文学史上に名を残しているスコットランド旅行記といえば、ジョンソンの『スコットランド西方諸島の旅』(*A Journey to the Western Islands of Scotland*)であり、残念ながら、ペナントの作品を先に思い出す人は稀であろう。この人気の差は、両者の執筆スタンスの差に起因する所が大である。ジョンソンの書物は、訪れた先々での風物や事物にたいする彼の意見と見解が鋭い洞察力を持って解説されるのに対し、ペナントの記述は科学者のフィールドワークの趣がある。

ペナントは1773年と1776年の2度にわたりウェールズを旅している。それをまとめたのが『ウェールズ旅行記』(*Tour in Wales*)で、ウェールズを紹介したものとしては大変貴重なものであつた。晩年の作品『ロンドン』(*Account of London*)は、旅行家としてのペナントには否定的であつたジェームズ・ボズウェル(*James Boswell, 1740-95*)が唯一褒めたものであり、発売後2年で3版を重ねた。1782年に出版された『チェスターからロンドンへ』(*Chester to London*)は、毎年ロンドンへ行くペナントが綴ったイングランドの町や自然の記録である。『大陸旅行記』(*Tour on the Continent 1765*)はペナントの没後150年あまり経った1948年になり初めて出版されたが、彼の最初の旅行記であり、そこにはその後の旅行記の元となる性格がすでに表れている。彼が晩年計画した『地球の概略』(*Outlines of the Globe*)は動物学者(博物学者)としてのペナントと、旅行家としてのペナントの融合した著作になるはずであつた

4. 日本におけるペナント

日本においては、ペナントはほとんど一般には知られていないのが現状である。彼の名が目につく機会がもっとも多いのは、おそらく現代のナチュラリ

ストのバイブル的存在であるギルバート・ホワイトの『セルボーン博物誌』であろう。二部からなるこの博物誌の第一部がトマス・ペナントに宛てられたホワイトの書簡からなっているのは周知の事実であるが、その本文中には『英国動物誌』とスコットランド旅行への言及がある。その他の主だった邦訳書においては、エリック・ホブズボウムとテレンス・レンジャーが編集した *The Invention of Tradition* (前川他訳『創られた伝統』紀伊国屋書店、1992年) の中のプリス・モルガン(Prys Morgan)の論文「死から展望へ・ロマン主義時代におけるウェールズ的過去の探求」にペナントの名が散見される。またリンダ・コリー (Linda Colley) 著、の *Britons: Forging the Nation 1707-1837* (川北稔監訳『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版局、2000年)のスコットランドに関する部分にペナントへの言及がある。しかしこれらを除けば、ペナントは一部の専門家が知るだけであろう。

英文学の分野においては、ワーズワス(William Wordsworth, 1770-1850)研究者による湖水地方研究において、ピクチャレスク美学のウィリアム・ギルピン(William Gilpin, 1724-1804)と共に言及されることがたまにある。また前述したジョンソンのスコットランド旅行記やジョセフ・バンクス関係でエピソードとして言及される程度である。

しかしこのような現状であるにもかかわらず、1940年に村岡勇の「トマス・ペナントのスコットランド旅行記」が『英文学研究』(第20巻第3号)に発表されたということを忘れてはならない。この論文はギルピンやジョンソンの文章にペナントの旅行記の影響があることを指摘した大変貴重な論文であるが、太平洋戦争直前という困難な時期に日本でペナントが読まれていたことに爽やかな驚きすら感じるのである。